



TITLE:

# 仏典の中の樹木：その性質と意義 (3)(護摩の樹木)

AUTHOR(S):

満久, 崇麿

---

CITATION:

満久, 崇麿. 仏典の中の樹木：その性質と意義(3)(護摩の樹木). 木材研究資料 1974, 8: 16-37

ISSUE DATE:

1974-03-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/51274>

RIGHT:

## 仏典の中の樹木

### —その性質と意義— (3)

(護摩の樹木)

満久 崇 磨\*

Trees in the Tripiṭaka (3)

Takamaro MAKU

密教は古代インドのヴェーダーの宗教から発祥した仏教の一派で、大日如来の加護をうるため曼荼羅をかかげ真言をととなえて加持祈禱を行う。密教行者が念力と真言の力によって超能力をうるかどうか筆者にはわからないが、世の中の森羅万象には自然科学の力では理解しえない何か霊的なものが沢山存在していることは否定できないようである。密教修法の基本は護摩（火祠）の儀式にある。

護摩には災害を払うための息災法、繁栄を増進するための増益法、怨敵を降伏させるための降伏法、和合敬愛を求めるための敬愛法、地獄、餓饉、畜生の三悪道の衆生を救うための鈎召法などいろいろある。

密教の教典は3世紀ごろから中国に伝わりはじめたが、ここで中国人の心に強くアピールして6世紀から8世紀にかけて多くの密教仏典が本格的に漢訳された。したがって、漢訳密教仏典に登場する植物には他の仏典に比較して中国的色彩がかなり強くあらわれている。

日本への密教の伝来はかなり早く、奈良時代初期といわれているが、9世紀のはじめ最澄（天台宗）、空海（真言宗）によってそれぞれ宗派が確立され、その発展の基礎がきずかれた。

さて密教修法の根本である護摩の儀式については、金剛頂瑜伽護摩儀軌、大毘盧毘那成仏神変加持経（大日経）、蕤咽耶経その他の諸教典の中に詳しく説明され、その中にあらわれる植物も多種類にわたっており、またその種類も教典によってかなりちがっているが、樹木名の確実なものだけをピックアップして筆者なりに整理してみるとはば次のようになる。

まず金剛櫛（護摩壇の四方の柱）には佉陀羅\*\*（khadira, アセンヤクノキ）、もしこれなくば苦練木を用い、護摩壇の炉には白檀香（Candana）と瞿摩夷（Gomaya, クマイ、牛糞、インドでは最も神聖なものの一つ）を塗り、その周囲には吉祥草（Kusa, クサ草）、その階段の上には茅草をしき、真言の行者やその弟子達はそれぞれ入壇に先立って健全な阿説他（Aśvatta, インドボダイジュ）と優曇鉢羅（Udumbala, ウドンゲノキ）の樹木をかみ、これによって一切の煩惱を断ずる。

樹木は香花で飾った長さ12指（約25 cm）の一種の楊枝で、これをかむことによって心身を清め煩惱をかみ砕くことを意味し、色調白く材質やわらかな木を用いる。インドでは古くから食前に楊枝をつかう習慣があり、十誦律卷40で仏陀は食事の際楊枝をかむことを許しその5利益を次のようにといている

「1に口苦からず、2に口臭からず、3に風を除き、4に熱病を除き、5に痰癰を除く。また5利益あり……………」

\* 木質材料学研究部門 (Division of Composite Wood)

\*\* 文中の漢訳樹木類のうち括弧内に梵語名および（または）和名をふしたものは原則として第1、2報で説明したものをいみする。

さて護摩の儀式では次に

白檀、沈香 (Agaru, ジンコウ), 多迦羅 (Tagara, サンユーカー), 丁香 (Lavanga, チョウジノキ) およ  
び桂心香  
などの塗香

薫陸香 (Kunduru, インドニューコウ), 乳香 (Turska, 同前), 安息香 (Kālānusārin, アンソクコウノ  
キ), 甘松香 (Tagara), 天木香, 竜腦香, 薩闍羅沙香, 烏尸羅香, 摩勒迦香, 香附子香, 青木香および鬱金香  
などの香を, また

曼陀羅 (Mandāra, デイコ), 蓮華 (Padma, スイレンまたはハス), 摩里迦 (Mallaka, マツリカ),  
那婆摩利迦 (Navamālīka, 同前), 瞻蔔 (Campaka, キンコウボク), 阿輸迦 (Asoka, アショカ), 多迦羅,  
迦曇婆 (Kadamba, キャダンプバ), 迦尼迦羅 (Karnikāra, モミジバウラジロ?), 阿婆那 (Asana, アサナ),  
波羅羅 (Pātali, テリハボク?), 沙羅 (Sāla, サラノキ), 摩羅底, 群多, 奔那迦, 計沙羅, 底羅迦, 弘利  
曳底旧, 尸多乾他および, 俱羅婆迦  
などの花と

阿摩勒果 (Āmalaka, アンマロク), 迦必他果 (Kapittha, ナガエミカン), 波那沙果 (Panasa, パンノ  
キ), 柿子 (Timbaru, インドガキ), 石榴果, 毘闍補羅迦果, 吒吒子, 羅句者果, 迦羅末多果  
などの好果を供養し, これらの供物を阿里迦樹の葉上におく。

食を下すべき所には清き芭蕉 (Kadali, バナナ) の葉をしき, あるいは波羅沙 (Palāṣa, ハナモツヤクノ  
キ) の葉をしく。

また降伏の事をなすには

尼婆 (Nipā, キャダンプバ), 句吒庶 (Kutaja, コネッシ), 毘羅婆 (Bilva, ベルノキ), 佉陀羅, 尸俱魯, 阿  
底目多迦, 鵝多迦, および苦練木  
の諸花を供養し,

仇毘多羅 (Kovidāra, フイリソシンカ), 句吒庶, 建吒迦  
などをもって護摩し,

息災の事をなすには

注多 (Cūta, マンゴー) の葉, 優曇鉢羅の木および果実, 阿輸他 (Āśvatta, インドボダイジュ), 波羅  
沙, 白檀香, 群多の花あるいは苦練木,  
増益の事をなすには

毘羅婆果, 天木香, 阿輸迦, 阿婆那, 竜華香, 天門冬  
をもって護摩する。

また

迦尼迦羅, 計娑羅などの白い花, 白檀, 沈水などの焼香は仏部\*に供養し, 阿輸迦, 那婆摩利迦, 群多,  
弘利曳底旧, 薄拘羅 (Bakula, ミサキノハナ), 迦羅毘羅, 毘羅 (婆) などの花, 黒沈水, 安息香などの香  
は金剛部\*に供養する。

一般に乳木 (護摩木) には吉祥樹 (インドボダイジュ), 優曇鉢羅樹, 佉陀羅木, 阿没羅樹 (Amra, マン  
ゴー), 遏迦木を用い, 息災法には甘き味の木, 敬愛法には花ある木, 増益法には果ある木, 降伏法には苦  
き木, 鉤召法には刺ある木を用いる。

この外, 各修法によっていろいろの樹木が引用される。たとえば

\* 密教の世界観は智徳を表わす金剛界と慈悲を表わす胎藏界からなり, それぞれ次のように分れている  
金剛界: 蓮華部, 金剛部, 仏部, 寶部, 羯磨部  
胎藏界: 仏部, 蓮華部, 金剛部

- ・ 底羅紺法(?)を成就せんと欲せば末羅摩子や末度迦華を和合し、成就法には阿里迦樹を、もしまた信愛法をなさんと欲せば月の8日分は無憂樹(アショカ)の下に詣で末陀那果(Madana, シロバナヨウシュチヨウセンアサガオ)を食し、真言を誦する。無病と財を願うには毘羅婆樹をもって金剛杵を作り、一切の鬼魅から脱出するには佉陀羅を、求財の法を成就せんと欲せば遏迦木または牛膝を、対敵の法には阿没羅樹をもってする。また雨乞いの修法には阿輸迦の花、沈香、摩陀那果、闍提(Jati, タイワンソケイ)の花の香、薰陸香、白膠香、尸利縛色得伽葉をもって護摩すべしとしている。

なお日本の真言宗ではヌルデをもって護摩木とするが、これは金剛頂瑜伽中略出念誦經などに

「吉祥樹を以て護摩木となし、この木なければ白汁ある木を以て之に代うべし」

とあることによったものであろう。ヌルデは一名白膠木ともよばれ、枝を折ると白色の粘つこい樹液を出す。インドボダイジュのない中国ではもっぱらこの木を護摩木に用い、それがそのまま日本に伝えられたものであろう。

かくして護摩の修法をおえれば

「白き歌羅毘羅花を散じ、あるいは赤き歌羅毘羅花を誦し、あるいは須末那花(Sumánas, ソケイ)を以て光顯をなせ」

となる。

以下これらの樹木草本の内、未出のものについて説明すると

1) 苦 練 木 *Picrasma quassioides* Benn. ニガキ

亜熱帯ヒマラヤから中国南部、台湾、日本に分布し樹高10 m 前後に達する落葉喬木。葉は羽状複葉で互生、花は淡黄白色。材は黄白色で木理はトネリコ *Fraxinus japonica* Bl. に似ているが導管がトネリコほど顕著ではない。ねばりがありかつて天秤棒に愛用されたそうであるが、農機具、曲物にも用いる。葉、枝、



写真1 *Picrasma quassioides* Benn. ニガキ (京都植物園)

樹皮は苦く、煎じて駆虫薬にする。金剛櫛にアセンヤクノキの代用とするのは、やはりこの木の強度的特性によるのであろう。

2) 茅 草 *Imperata cylindrica* Bea. Darbhā, チガヤ

イネ科の草、早春に細長い絹絲状の白色の穂がでる。アジア全域に分布し、根茎を生薬白茅根といい腎臓、尿道炎の消炎剤、止血剤となる。われわれに馴染の深いこの春の草チガヤには次のような古代インドの神話がある（木村秀雄，カーリダーサ文学集）。

ある時仙賢カチャバの二人の妻ビナタとカドルが馬の色について論争して、ビナタは負けカドルの奴隷となった。彼女の息子ガルダは不死の水アマリタ（amṛita）のはいった壺を天国から持出して母に与え彼女を自由の身にしたが、カドルの息子ナーガ（蛇）らはその壺をダルバ草（Darbhā）の上においた。インドラの神はナーガ達がこの水をのんで不死の身になることをおそれて壺をかくす。これを知ったナーガ達は悲嘆にくれながらダルバ草の上にこぼれたアマリタの水滴を必死にのんだ。このため蛇の舌がきれて今日のような二枚になったという。

3) 桂 心 香 樹 *Cinnamomum cassia* Bl. トンキンニッケイ

桂心香はこの樹皮のコルク層を除いたものでいわゆる漢方薬桂心。香料あるいは発汗，解熱，鎮痛などの医薬用として有名。写真2は同属のニッケイ *C. Loureirii* Nees.

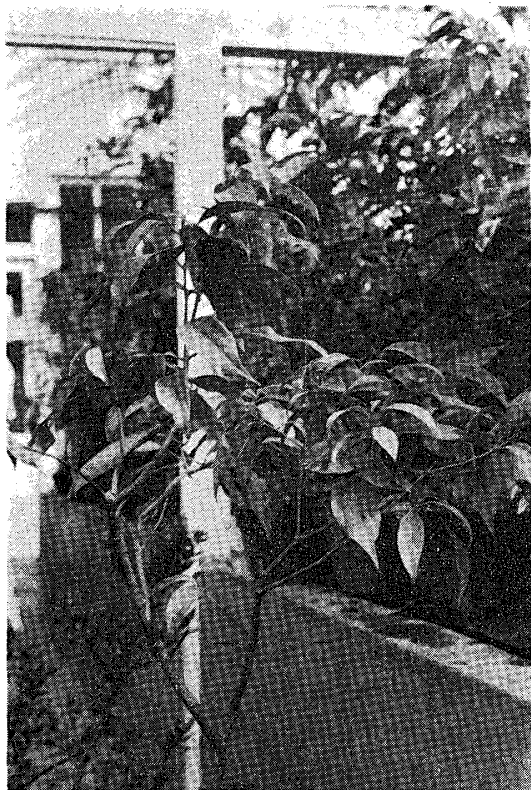


写真2 *Cinnamomum Loureirii* Nees ニッケイ  
（日本新薬株式会社山科植物研究所）



写真3 *Juniperus rigida* S. et Z. ネズミサシ  
（京大演習林）

4) 天 木 香 樹 *Juniperus rigida* S. et Z. ネズミサシ

天木香樹は本州中部以南，中国北部に分布し，樹高約15 m，樹幹直径約0.3 mに達する常緑針葉樹。葉は針状鋭尖で痛く，この枝をネズミの通う道にさしこんでおくともネズミを刺してその侵入を防ぐのでこの名

がつけられたという。葉の形、つき方がヒマラヤシダー *Cedrus Deodara* Loud. に似ているので漢訳仏典ではこれと混同されていることがよくある。果実は直径数 mm の球形で洋酒ジンの香料に用いる。天木香はこの木の樹脂でビャクダンに似た芳香をもっている所以この木を一名和白檀ともいう。

5) 龍 腦 香 樹 *Dryobalanops aromatica* Gaertn.

マラヤ、スマトラ、サラワク、ブルネイ、カリマンタンに分布する樹高 50 m、樹幹直径 1.0 m に達する喬木で葉は卵形互生。材は赤味をおびた淡褐色、気乾比重 0.7~0.8、建築家具用材。現地では kapur ○○ と呼び、日本にもカプールの名で輸入され合板、床板用材として重要である。現在の日本の木材工業の一端



写真4 *Cinnamomum Camphora* Sieb. クスノキ (京大)

を支えている重要樹種である。龍腦香はこの木に含まれている精油で香料のほか医薬、工業用。仏典ではよく龍腦と樟腦とが混用されているが、樟腦はクスノキ *Cinnamomum Camphora* Sieb. の樹幹、根株からの抽出成分で医薬、工業原料に用い、とくに心臓、神経中枢の興奮剤としてのカンフルや防虫剤は有名である。現在はテレピン油から龍腦を作りさらに樟腦を作っているから、いわば樟腦は龍腦にして龍腦に非ず、しかもまた龍腦なりで、これすなわち色即是空、空即是色。

クスノキは日本、中国、台湾に産し、ジャワ、インド、その他、熱帯、亜熱帯各地にも植栽されている。樹高 40 m、樹幹直径数 m に達する常緑の喬木で、抵抗力が強く巨木となる。日本では関西以南に多い。材は明るい黄褐色系で気乾比重 0.6 前後、比重の割に強度が高く木理がきれいで芳香をもつため古くから仏像、器物、高級家具、突板として愛用されているが、現在では庭園樹や御神木として保護されているものが多く、用材として入手困難な貴重材である。

わが国にはじめて仏像が伝来したのは敏達 6 年 (577) あるいは敏達 13 年 (584) といわれているが、その後間もなく国内で日本人の仏師による造像が行われ、飛鳥時代における木造仏像の材料にはもっぱらクスノ

キが用いられている。たとえば樹種の確実なものを2, 3あげると

法隆寺の観世音菩薩立像（塗箔）

百済観音立像（着色，乾漆）

四天王立像（着色）

文殊菩薩（塗箔）

中宮寺の弥勒菩薩

などがある。

クスノキは芳香があるため将来仏のビャクダンノキの代りに使ったのであろうとよくいわれている。それもあるかもしれない。しかし、上例からも判るように素木造りが少く、ほとんどが塗箔，乾漆像であるからとくに芳香にこだわっていたとも考えられない。

これはやはり、クスノキが入手しやすく、当時の日本人が彫刻材として使いなれていたことが一番大きな理由であろうと筆者は思う。日本でのクスの利用は非常に古く、弥生後期の静岡県山木遺跡からはクス製の鉢，同じく登呂遺跡からは形，用途不明ながらクス製の木器が出土しており，山木遺跡や大分県安国時遺跡からはクスノキの種子がかなり沢山出土している。したがってわれわれの祖先は飛鳥時代までに相当クス材を使いこなしていたと見る事が出来るからである。しかし，木彫仏像の黄金時代といわれている奈良，藤原時代以降では，例外はあるが素地はもっぱらクスからヒノキ *Chamaecyparis obtusa* S. et. Z. に変っている。たとえば確実にヒノキ造りとされているものを古い時代から2, 3あげてみると

奈良時代：東大寺三月堂の吉祥天，弁才天（乾漆），不空罽索観音（光背ヒノキ曲木）

藤原時代：京都法性寺二十八面千手観音（臂をのぞく），宇治平等院鳳凰堂壁面の諸菩薩浮彫，京都醍醐寺聖観音立像（素木一木造り），京都南禅寺聖観音立像（漆箔一木造）

などがある。

仏像素地がこのように飛鳥時代から奈良時代にかけて広葉樹（クスノキ）から針葉樹（ヒノキ）へ移行したのに対して，寺院建築の主材が逆に飛鳥時代の法隆寺で代表される針葉樹（ヒノキ）から奈良時代の当麻寺にはじまる広葉樹（ケヤキ）へと次第に移行していったことは，まことに不思議な対照ともいえるべきであろう。

日本人は古くから建築構造材に針葉樹を好んで愛用したとよくいわれるが，木材加工技術や輸送方法の発達していない古い時代に建築構造材を選ぶ場合，感覚的な好みよりもまずそれが手近にあること，加工しやすいこと，軽くて強いことなど，極めて月並なことが第1条件になろう。このことは時代は下るがわが国同様木造住宅の多いアメリカ合衆国でも古くから針葉樹が主体をなし，広葉樹の多いオーストラリアでは広葉樹材の占める割合が多い例からみても明かである。

わが国で最も古い建物の1つである静岡県登呂遺跡，山木遺跡（いずれも弥生時代後期）の住居や倉庫の柱，梁，梯子あるいは柵の矢板などには主にスギ，一部にイヌマキ，イヌガヤ等が使われているが，現存する最古の木造建築物である法隆寺の構造材はほとんどヒノキで占められている。庶民の住居と贅をつくした寺院建築では比較にならぬかもしれぬが，この弥生時代から飛鳥時代にかけてのスギからヒノキへの変遷の歴史は現在の所知るよしもない。その意味で湯納遺跡の調査結果がまたれる。おそらくわれわれの祖先は長い間いろいろの針葉樹を使っているうちに，その中から木肌，色調，香，耐久性などいろいろの点ですぐれたヒノキを発見してその魅力にとりつかれ，寺社建築にヒノキ一辺倒の時代を作りあげたものであろう。

しかし，こうしてヒノキの大材がさかんに使われると当然その入手は次第に困難になり，東大寺再建（鎌倉時代，1180年代），吉野金峰山寺建立（室町時代，1400年代）の頃にはヒノキの大材を求めて随分苦労したようである。このヒノキ良材の欠乏と，どちらかといえば針葉樹のとりすました冷たい美しさから，暖かい絢爛たる広葉樹空目への人人の開眼が，工具の発達と相俟って，ヒノキからケヤキへと移行し，この兆

は奈良時代の当麻寺西塔からあらわれはじめ江戸時代には最盛期をむかえた。

ケヤキ *Zerkowa serrata* Makino もまた、わが国では古い時代から什器類に使いなれた材で、登呂遺跡からは杓子形木器、山木遺跡からは木杯などが出土しており、古事記にはツキケヤキ（槻と櫟<sup>つぎけやき</sup>について）は諸説があるがここでは槻をツキケヤキとしておく）の弓があげられている。また正倉院御物中には「赤染櫨木胡床」という槻で作った赤漆塗りの椅子が保存されている。背もたれ肘付きの立派なもので、その機能も現代のものと変わらないと思われるが、加工面はさすがに現代のものほど平滑ではない。国宝級のケヤキ造りの仏像は例外的であるが、その2、3をあげると

京都府八幡町薬師寺の薬師如来立像（彩色、一木造り、貞観時代）、京都府大原野喜春庵の十一面観音立像（一木造り、藤原時代）などがある。登呂遺跡の矢板（スギ？）には手斧（ちょうな）の跡が歴然と残っているそうであるが、手斧の柄には昔からニレ *Ulmus* sp. を最上としエンジュ *Sophora japonica* L., ケヤキこれに次ぐとされている。関西地方には手斧の柄には専らエンジュを用い、これを堆肥中にさしこんで適当に軟化させるという古い曲木技術が伝えられている。

6) 薩闍羅沙香 *Sarja-rasa, Kāla*, 白膠香

サラノキの樹脂で五種樹膠の1つ。宗教の儀式的薫香や蚊やりに用い、ボートのコーキング剤、塗料などにも利用される。

7) 烏尸羅香 *Usira*

イネ科の *Andropogon Muricatum* Retz. Binara の根から採取した香料

8) 摩勒迦 *Curcuma longa* L. Marūka, Haridrā 鬱金

ショウガ科の多年草、インド原産で花は淡黄色、根茎から黄色染料をとりカレーや沢庵漬などの色付けに用い、健胃、利尿の芳香性生薬。

しかし、漢訳仏典ではよく Kuṅkuma すなわち *Crocus sativus* L. アヤメ科のサフランを鬱金と混同している。たとえば

「鬱金華の萎悴すといえども尚一切の華にまさる如く正見の比丘も亦是の如し。余の衆生にまさること百万倍なり」（大乘本生心地観経）。

この鬱金華はクンクーマすなわちサフランの花をさす。サフランは地中海沿岸、インド原産、6弁の淡紫色の花は芳香を発し、橙赤色の花柱および柱頭は解熱、鎮痛、通経の生薬である。

9) 香附子 *Cyperus rotundus* L. Musta, カヤツリグサ

熱帯、亜熱帯産の1年生または多年生草本。香附子香はこの根茎。生薬コップシは通経剤、媚薬として有名である。

10) 青木香 *Aristolochia debilis* Sieb. et. Z., ウマノスズクサ

ウマノスズクサ科の多年生蔓草。土青木香ともいい、花は鎮咳、根は毒虫の解毒用生薬。

11) 摩羅底樹 *Mālātī*

この樹木については諸説があり

*Jasminum grandiflorum* L. タイワンソケイ

*Stereospermum suaveolens* DC. センダンキササゲ

*Aganosma calycina* A. DC.

などがあげられる。前2者については第2報で説明した。後者は *Echites caryophyllata* ともいい、キョウチクトウ科。花はジャスミンに似た芳香をもち、その蕾は女性の白い歯並を連想させるという。



12) 群 多 *Jasminum* sp., Kunda

ジャスミン属の1種で白色の花がさき、その芳香は森に住む行者の心さえかき乱すという。

仏身32相中の（四十）齒相では仏陀は（四十枚の）齒並が正しくきれいで、かつ純白であらねばならぬと規定しているが、方廣大莊嚴經一卷3，誕生品第7によるとその純白なることまさに群多の花の如しとなる。

13) 奔那迦樹 *Mallotus philippinensis* Muell Arg., Purnaga クスノハカシワ？

この木についても諸説があるが

*Rottleria Tinctoria* L.

または

*Calophyllum inophyllum* L.

とする意見が強い。前者はトウダイグサ科の *Mallotus philippinensis* のことで、樹高6～10 mの常緑の熱帯性小喬木であるが耐寒性が強く日本の温暖な地方では露地でも生育する。葉は披針状または長橢円形、果実につく赤色の腺体をカマラ（kamala, 梵語で赤を意味する）といい条虫の駆除薬に用いる。材は淡紅



写真5 *Mallotus philippinensis* Muell Arg. クスノハカシワ（伊豆薬用植物栽培試験場）

色、気乾比重0.7位で、工具の柄などに利用する。切削したばかりの新材には芳香がある。同属のアメガシワ *M. japonicus* Muell Arg. は御承知の如く若葉が鮮紅色を呈し、樹皮は消炎、整腸の生薬である。

クスノハカシワは梵語で aruna（阿盧那）ともいい、華嚴經一昇兜卒天宮第23によると

「釈迦トソツ天におもむくや百万億のアルナ香の香氣高く、その甘美な味を以て釈迦を供養す」

とあり、密教教典といい華嚴經といいその内容はこの樹木の性質とあまり一致しない。これについては今後の調査にまちたい。後者については第2報で説明した。

14) 計沙羅樹 *Mimusops elengi* L. Késara, Bakula, ミサキノハナ?

この木についても

*Rottleria Tinctoria* L.

*Mimusops elengi* L.

*Mesua ferrea* L.

などの諸説がある。前者には花に特長はないが、後2者は何れも白花で芳香を発し、その点では何れともきめ難いが、*M. elengi* とする説が強い。これらはいずれも第2報で説明した。

15) 底羅迦樹 *Clerodendron phlomoides* L. Tilaka

クマツヅラ科クサギ属の樹木で、インドのヒマラヤからビハール、オリッサ、セイロンに分布する。樹高約10mに達する灌木性の木で雪白の花が咲く。



写真6 *Clerodendron thomsonae* L. ゲンペイクサギ (京都植物園)

「仏陀の歯相雪白なること底羅迦の如し」(僧伽羅刹所集経卷中)

写真6は同属の *C. thomsonae* L. ゲンペイクサギ。

16) 払利曳応旧 Priyāngu

この言葉も次のいろいろの草木を意味している。

(1) *Panicum italicum* L.

(2) *Sinapis ramosa* Roxb.

(3) *Ichnocarpus frutescens* Br.

(4) *Aglaia odorata* Lour.

(5) *Aglaia Roxburghiana* Miq.

(1) はイネ科キビ属, (2) はアブラナ科のキガラシ, カラシナ, ツアーサイ類, (3) はキョウチクトウ科の蔓性植物で, インド古典では *priyāṅgu* を香辛料や蔓性植物としている場合もあるため (2), (3) 説がかなり強いようである。(4) はセンダン科のモラン, 樹高3~6mの小喬木で, 葉は奇数羽状複葉, 5弁の小花が腋性円錐花序につき, 芳香を発する。原産地中国ではこの花をお茶にまぜ, セイロン, マラッカ, シンガポール等にも植栽されている。(5) はインド原産の常緑喬木で, 材は紅色をおび, 木理が密で車輻, 器具用材に適するという。*Aglaia* spp. は広く東南アジアに分布し, 小木から樹幹直径60cmの中喬木まであり, 材の比重も0.6~0.9の範囲にわたり芳香のあるものが多い。また木理がきれいで高級家具に適する材もある。仏典の内容から花に重きをおけば, *A. odorata* が最有力となろう。

17) 尸多乾他 *Solanum aculeatissimum* Jacq.? Sitakaṇṭhā

白花 (sita) の Kaṇṭakāra で, Kaṇṭakāra には

- (1) *Solanum aculeatissimum* Jacq.
- (2) *Bombax malabaricum* DC.
- (3) *Flacourtia sapida*

らがあげられる。

(1) はナス科のサンゴナス (トゲハリナスビ) でその名の如く茎に直刺が密生している熱帯性の1年または多年草で, 白色の花をもつ。写真7は同属の *S. Seaforthianum* Andr. ルリイロツルナス。(2) については第2報で説明した如く外側が黄白色, 内側が橙紅色のきれいな花が咲く。(3) はイイギリ科の *F. Ramontchi* L'Her. の変種で, インド全域, セイロンからビルマ, マラヤにかけて野生または栽培されている。樹高約10mに達する常緑喬木で, 小形の花が総状花序につく。辺材は淡褐色, 心材はチョコレート色, 気乾比重0.8~1.1, 磨耗に強く滑車に好適で, その他農器具類やろくろ細工に用いられる。



写真7 *Solanum Seaforthianum* Andr. ルリイロツルナス (京都植物園)

18) 倶楽婆迦 Kurabaka, 句欄荼迦 Kuraṇḍaka

いずれも *Amaranthus* sp. (ヒユ科, ケイトウ類) または *Barleria* sp. (キツネノマゴ科, パーレリア属) で Kurabaka は赤花, Kuraṇḍaka は黄花とされている。

クランダの花は降伏法における供養の花であるが, 大宝積經一宝梁緊会第44には

「クランダの花は色鮮かで形よけれど, その気の臭なること糞の如くなれば, 智ある人遠く離れて近よらず。沙門のクランダは沙門に似たる行をあらわせど臭穢不浄をもち破戒をなす。かくの如き沙門のクランダを智者は親近せず」

また大方等大集經一日藏分護持正法品には

「破戒の僧は沙門中に住すといえども詭曲虚偽にして沙門中の賊なり。衆中にあってなおクランダ華の無色無香なる如く心に和合せず, ……願うて亜比丘, 俗人を以て伴侶となす」

という意味の言葉があり, つじつまの合わぬ点もあるが, これらについてはなお今後の調査にまちたい。

19) 石 榴 *Punica Granatum* L. Dādima, ザクロ

熱帯, 亜熱帯では常緑, 温帯以北では落葉の喬木, 樹高約10m, 樹幹直径0.3m, 葉は対生長楕円形, 花は5~8弁で白, 淡紅, 斑等の各種がある。果実は球形で黄色から橙紅色で種子が多く多汁で甘酸ばく果実

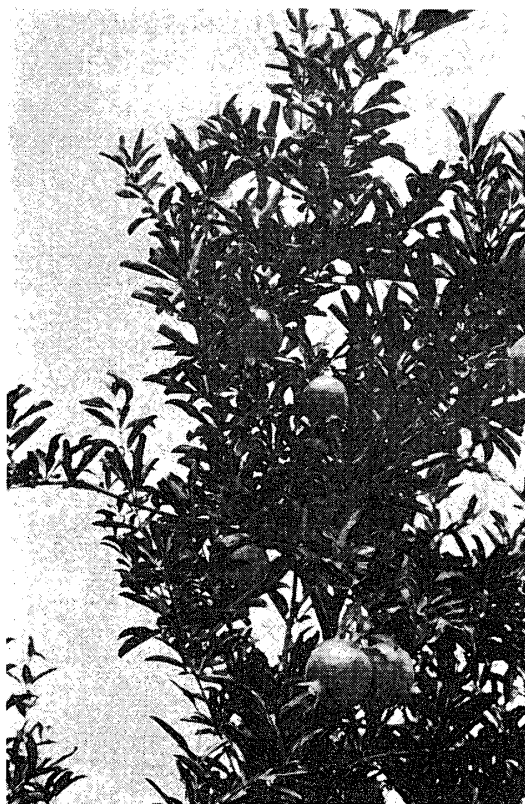


写真8 *Punica* sp. ザクロ (京都市内)

酒グレナデンを作る。

釈迦が鬼子母神 (訶梨帝母) にザクロの実を与え, 今後人間の子供が食べたくなつた時にはこの実を食べよといましめ, 子供を殺さないことを誓わせた話は有名であるが, この由来から鬼子母神像は右手にザクロを持っている。またザクロの実は魘魅魎魎の呪咀法にも用いる。

「鬼を思うものあらば, 瞿摩夷 (牛糞) を以て小檀を塗り麩炭 (小麦の糠をやいて作った炭) を以て地に

かきて鬼魅の形を作り，真言を誦し石榴果を以てこれをうてば啼泣して去る」（七俱胝仏母所説准提陀羅尼經）。種子が多いことから子福を意味することもある。根皮，果皮は条虫駆除の生薬。欧米や中国ではザクロを果樹として栽培している。

20) 毘闍補羅迦，俱縁樹 *Citrus medica* L. Bijapūraka, Mātulaṅga, シトロソ

常緑の喬木で長楕円形鋸歯の大形の葉が互生する。インドヒマラヤ原産。果実は広楕円形でレモン色，酸味が強く芳香がある。果皮からクエン油，レモン油をとる。

「三昧耶曼荼羅の第三院において，阿摩羅（マンゴー）の梢葉をとりて新瓶の中におさめ，俱縁果をとりてその瓶口の上に按ぜよ」（一字奇特仏頂經）。

同属の *C. leiocarpa* (コウジ)，*C. aurantium* L. (ダイダイ) の果皮を橘皮または橙皮とよび健胃の生薬。またこの変種 var. *sarcodactylis* Swingle の果実は果頂の心皮が分裂してしわができ，丁度掌のような形をしているのでブッシュカン（仏手柑）という。

21) 吒 吒 子 *Zizyphus Jujuba*, Koli

ナツメの果実（第2報参照）。

22) 羅 句 者 樹 *Artocarpus Lakoocha* Roxb. Lakucu, Lakaca ラクーチャパンノキ

熱帯ヒマラヤ，アッサム，ベンガルからビルマに分布している。葉は長楕円形で，果実は食用。材は第2報の *A. integrifolia* に似ているが，やや重く気乾比重0.65位。黄褐色で樹脂を多く含み耐朽，耐虫性が強い。橋脚，柱その他一般建築土木用に適し，中級の家具用材ともなる。

23) 迦羅末多樹 *Areca Catechu* L. Karamatta, ビンロージュ

樹高15 m 以上，樹幹直径約20 cm に達し，葉は頂生叢出羽状複葉。マラヤ原産，インドからマレーシ

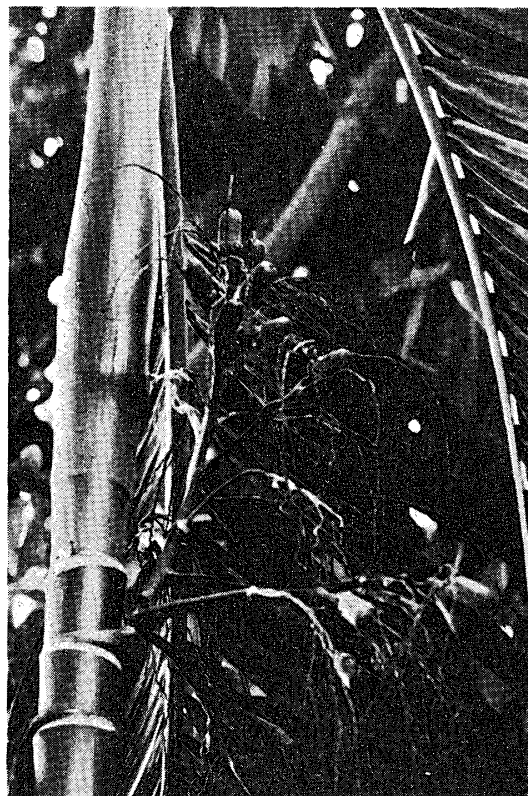


写真9 *Areca Catechu* L. ビンロージュの実（京都植物園）

ァに分布する。果実は 40~60 mm, 住民は未熟果と石灰をまぜコショウ科のキンマ (*Piper Betle* L.) の葉で包んで嚙む。清涼で歯の健康によいという。果皮を大腹皮, 種子を檳榔子といいともに利尿, 健胃あるいは条虫駆除の生薬である。

24) 阿里迦樹, 遏迦木 *Calotropis gigantea* Br. Arká, Tarani, アコン

樹高約 3 m の半木本性灌木で葉は大きな広楕円形, 対生。花は白色または淡紫色の釣鐘形で先端が 5 裂して異臭を発する。原産地インドでは聖花としてシバの神に供える。パンジャブからアッサムのヒマラヤ山麓に多く, セイロン, マラヤ, シンガポール, 中国南部に分布している。

大宝積経一菩薩藏会第12の3で釈迦がシャーリプトラに

「如来の坐する所, チャンパカ (キンコウボク), スマナス (ソケイ), ヴァールシカ (マツリカ), パータリ (センダンキササゲ, テリハボク), カルニカーラ (モミジバウラジロ?), アショカ, アチムクタカあるいはタラニの妙華開敷す」

と話しているように花に特長のある樹木であるが護摩の儀式ではこの大きな葉の上に供物をのせる。材はもっぱら木炭用。

25) 尸 俱 魯 *Moringa pterygosperma* Gaertn., Sigrú, ワサビノキ

樹高 7 m, 樹幹直径 50 cm 位の落葉喬木, 葉は 2~3 回複葉, 花は 5 弁の黄白色で腋生の円錐花序につく。子実から油をとり, 香油, 食用油, 機械油にする。熱帯ヒマラヤ, セイロン, ビルマ, マラッカ等に分布している。根, 葉はワサビ代用。

26) 阿底目他迦 *Gaertnera racemosa* Roxb. Atimuktaka, ホザキサルノオ

キントラノオ科の常緑の藤本で, 白色の花が腋生花序につき, 芳香を発する。仏典にはしばしばスマナス,



写真10 *Pandanus utilis* Bory. ビヨウタコノキ (京都植物園)

チャンパカ等の香油と共に登場する（第2報参照）。

27) 鵝多迦 *Pandanus tectorius* Sol. Ketaka, アダン

「持戒は鵝多迦華の香にも非ず摩盧迦の薫にも非ず。よく天中の香にまさるは(持戒の香の)最勝なり」(正法念処經一觀天品第6の2)。

アダンは樹高 3～6 m の常緑灌木、葉は線状披針形で頂生叢出。太い気根をもち雄花は芳香を發し香料になる。果実は直径 30cm 位の球形集合果で中に 50～60 個のピーナツ形の乾果(仁)があり、蛋白質と脂肪に富み、パプア島高原地帯などの土人は主要食料とする。葉は乾燥して織物、帽子、バスケットなど繊維用品の原料になる有用植物である。熱帯各地に分布、植栽されており、日本では九州、沖縄で露地に生育する。写真10は同属の *P. utilis* Bory (ビョウタコノキ) で性質形状アダンに似ているが、樹高 20 m の喬木となる。

28) 建吒迦 *Opuntia* spp., Kanthaka

サボテン科オプンチア属の有刺植物。鈎召法では三惡道におちた衆生をオプンチアの密生した刺によって

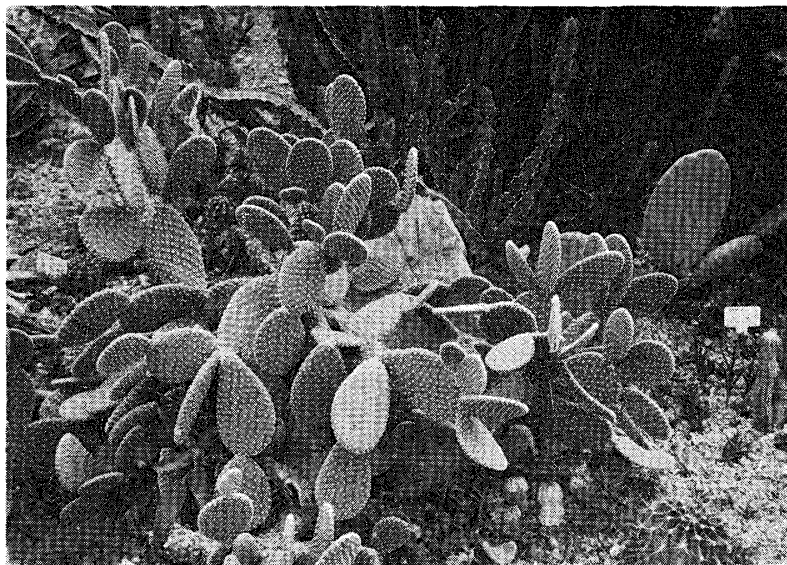


写真11 *Opuntia* spp. オプンチア属 (京都植物園)

救い上げる訳であるが、現在のような末世ではこの衆生済度もなかなかの難行であろう。

29) 龍華樹 *Nāgāpuṣpa*

梵語で *nāga* は蛇, *puṣpa* は華を意味し、弥勒菩薩の菩提樹である。

「弥勒菩薩成仏の暁には華林園中の龍華樹の下に三度の法会を開き一切衆生を度す(いわゆる龍華三会)」(文殊師利所説不思議仏境界經卷中)。

この木についても次の諸説がある。

- (1) *Mesua ferrea* L.
- (2) *Mallotus philippinensis* Muell.
- (3) *Michelia champaka* L.

密教仏典の内容からはいずれとも決定しがたいが(1)のセイロンテツボク説が有力である。これらの樹木についてはすでに説明した。



30) 天 門 冬 *Asparagus lucidus* Lindl. クサスギカズラ

食用アスパラガスの同属で、根の外皮を漢方薬天門冬といい、鎮咳、利尿の生薬。

31) 迦羅毘羅樹 *Nerium odorum* S. Karáviraka, キョウチクトウ

樹高3～6mの常緑小喬木。葉は夾披針状で、白、黄、淡紅、赤色などの5弁の花が頂生の散形花序につく。インド、ペルシャ原産、中国、日本まで分布。枝、葉、花、根とも有毒で、うつかり枝で箸に作ると中毒するおそれがあるという。根の抽出液は駆虫剤になる。中国では寺院によく植え、インド、イタリアでは



写真12 *Nerium* sp. キョウチクトウ (京都市内)

死体の上にこの枝葉をのせる習慣があるという。インドではこの花で作った花輪は謀叛者の印としてその頭にまかれる。大莊嚴(經)論卷12には巴樹提王が戒をすてて戦をいどんだ娑羅那を捕虜にして

「これ悪人なり。その頭上に迦羅毘羅の鬘(花輪)をつなげ」

と命じている。

32) 末 羅 摩 樹 *Morus* spp. Brahmbiya クワ属

マグワ *M. alba* は紀元前原産地の朝鮮、中国からインドにはいったと伝えられ、インドではヒマラヤの温帯地区からクマオン西部に分布栽培されている。日本にはこの変種といれるヤマグワ *M. bombycis* が多い。

葉は養蚕用はもちろん、茶のかわりに常用すると無病長寿をうるといわれ、果実末羅摩子は甘味多く生食でき、桑実酒も健康によい。乾果は止痛剤、桑根酒は血圧低下に効く。樹皮は繊維質で織物になる。昔からクワ材でお椀を作り常用すると中風にかからぬと言伝えられているが、これは根皮が桑白皮とよばれ血圧低下、中風の生薬として愛用されていることによる。材の平均比重0.62、比重の割に弾性係数や強度はやや低い、ねばり強さでは本邦第一という特長をもっている。木理がきれいで日本でも古くから高級家具、飾棚、器物類に珍重され、木魚もクワで作る。奈良県唐古池遺跡(弥生時代)からはヤマグワの高杯、椀、装身具、弓などが出土しており、正倉院御物の馬鞍にはクロガキやクワ製の鞍橋(くらぼね)や盤面クワの薄板寄木ばり、側面シタン、カリンの薄板ばりの豪華な碁盤や手箱類が保存されている。

日本が世界にはこる大工道具の墨壺は和漢三才図会によればクワを以て最上となしケヤキこれに次ぐとし、錐の柄もクワを以て最上としている。錐の柄の樹種は現在バラバラで先般研究室のものを数本調査した結果





写真13 *Morus* spp. クワ（京都植物園）

ではミヅキ、シデ、ヒノキ（？）などである。

現存する日本最古の墨壺は正倉院に保存されている儀式用のもので、2個共素地の樹種はわからないが1個は表面漆塗、1個はコクタンの突板張りである。「大工道具の歴史」（村松 貞次郎、岩波新書）によると実用的な最古の墨壺は明治12年（1879）東大寺南大門の梁の上から発見されたものでクワで作られているという。

### 33) 末度迦樹 *Madhuca latifolia* M. Madhuka, イリッペ

護摩の儀式に登場する末（摩）度迦は仏本行集経一卷60阿難因縁品にもあらわれるが、原産地インド全域に分布する主要用材樹の1つでビルマから東南アジアにかけて生育している。落葉大喬木で、花は黄白色で糖分を多く含み、食料、調味料にする。古代インド文学にはいろいろの酒の名前が出るが *Madhūka* もその1つ。おそらくこの花糖から作った酒であろう。また種子には脂肪が多くインドでは採油を目的として栽培し、マーガリン、石鹼、ろうそくなどの原料にし、仏典では罽頭油とよび、七日薬の1つにあげている。インドではマフア（mahua）といい、心材は赤味をおび、気乾比重約0.9で耐久性がよく衝撃や磨耗に強い。主に建築構造材、枕木、車輻に用いるが、繊維が波状配列をしてきれいな木理をあらわすことがあり家具材料としても喜ばれる。

漢訳仏典ではよく末度迦を甘草としている場合があるが、これはおそらくビルマでこの木をカンゾウ *kanzaw* と呼ぶことからきた混乱で、漢方薬の甘草 *Glycyrrhiza* spp. ではない。写真14は漢方薬ウラルカンゾウ *G. echinata* L.。

### 34) 牛 漆 *Achyranthes bidentata* Bl. Apamārga イノコヅチ

牛漆はヒユ科のイノコヅチ属の根で、婦人病、関節炎などに用いる漢方薬。

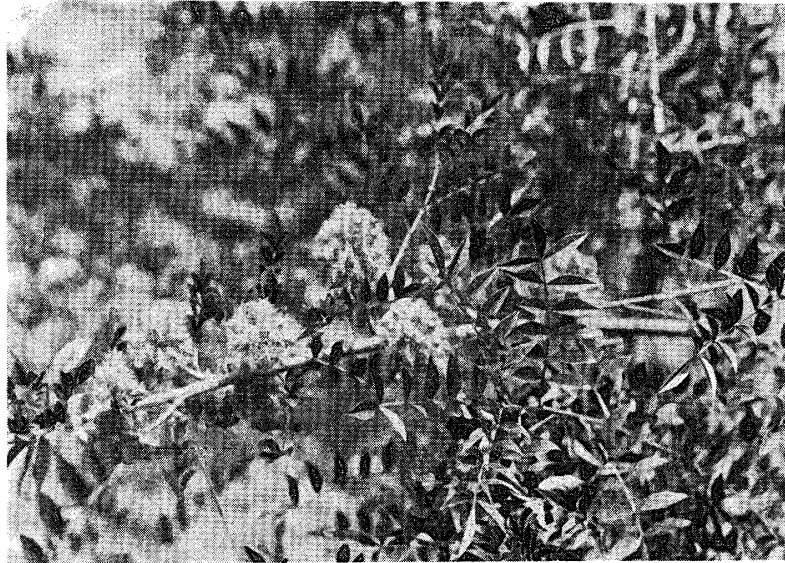


写真14 *Glycyrrhiza echinata* L. ウラルカンゾウ (京都植物園)

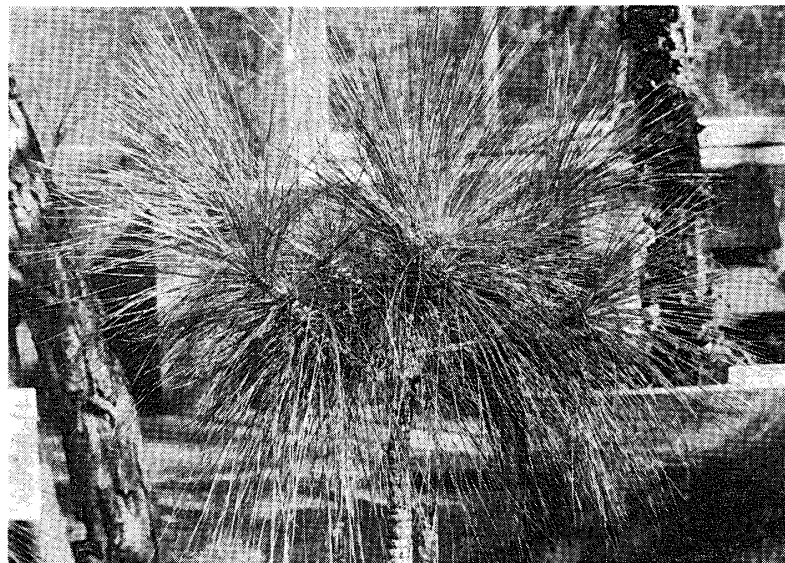


写真15 *Pinus longifolia* Roxb. ヒマラヤマツ (京大演習林)

35) 尸利縛色得伽葉 śrivesṭa(ka)

***Pinus longifolia* Roxb.** (Sarala, ヒマラヤマツ) の樹脂で、ヒマラヤシダー (*Cedrus deodara* Loud.) の樹脂に似た芳香をもっており、インド古典文学ではサララの樹液の香りやサララの枝が摩擦して山火事が発生する有様などが詩にうたわれている (木村秀雄, カーリダーサ 文学集第一)。ヒマラヤシダーがヒマラヤ西北部の標高1200~4000mに多いのに対して、ヒマラヤマツはヒマラヤ外周のインダスからブータンにかけて標高500~2000 m, クマオンでは2800 m 付近まで生育し、樹高約40 m, 樹幹直径1.5 m に達する。葉は長針状3葉, 節が多いが、針葉樹ではヒマラヤシダーに次ぐ重要樹種で、気乾比重0.5~0.6, 建築 構造材, 下地板, 梱包用材の外防腐処理をして枕木などに利用する。

36) 白 膠 木 *Rhus semialata* Murray. ヌルデ

護摩木ヌルデは日本のヌルデ属中の代表的な樹種であるが、中国、インドヒマラヤまで分布している。樹



写真16 *Rhus semialata* Murray. ヌルデ（京都植物園）

高10m，樹幹直径0.3m位の落葉の喬木で，葉は奇数羽状複葉互生。写真16にみるように葉軸両側に翼をもつのが特長。花は淡黄色で頂生円錐花序につき，枝を折ると白色の樹液を出すので白膠木ともいう。長野県伊那地方では旧正月にこの木を神仏に供え，これを年末の餅つきの薪にする習慣がある。中国では五倍子（タンニン原料）の採取を目的として植栽しているという。

ヌルデの材は現在日本では護摩木以外にあまり広く利用されていないようであるが，奈良唐古池遺跡（弥生初期）からは用途不明ながらヌルデの丸太が出土しており，日本書紀には聖徳太子がヌルデで四天王の像を造りたもうとあるから，やはり古くから日本民族の生活の中にとけこんでいる木といえよう。（未完）

### 参 考 文 献

- 木村 秀雄，カーリダーサ文学集第一，百華苑（昭和40年）  
村松貞次郎，大工道具の歴史，岩波新書（昭和48年）  
尾中 文彦，古墳その他古代の遺構より出土せる材片，その一（日林誌，18，8，昭和11年），その二（日林会大会号，昭和13年）  
満久崇麿，広葉樹の利用（その歴史の1断面）山林，1077（昭49.2）  
大分県東国東郡国東町安国寺遺跡調査報告書（京大文学部史学科図書室所蔵）  
静岡県田方郡韮山町山木遺跡調査報告書（同上）  
静岡市登呂遺跡調査報告書（同上）  
正倉院展目録集，奈良国立博物館  
その他，第1，2報に同じ

木材研究資料 第8号 (1974)

樹 木 学 名	科	属	和 仏 典 漢 訳 名	頁
<i>Acacia Catechu</i> Willd.	マ	メ	ア セ シ ヤ ク ノ キ 佉 陀 羅 竭 陀 羅	16, 17, 18, 19
<i>Achyranthes bidentata</i> Bl.	ヒ	ユ	イ ノ コ ツ チ 牛 漆, 阿 波 末 利 迦	18, 31
<i>Aegle Marmelos</i> Corr.	ミ	カ シ	ベ ル ノ キ 毘 羅 婆 樹, 毘 羅 樹	17, 18
<i>Aganosoma calycina</i> A. DC. ( <i>Echtes caryophyllata</i> )	キョウチクトウ	アガノスマ	摩 羅 底	17, 22
<i>Aglaia odorata</i> Lour.	セ	ン ダ	モ ラ シ 弘 利 曳 応	17, 24
" <i>Roxburghiana</i> Miq.	"	"	弘 利 曳 応 旧	17, 24
<i>Amaranthus</i> sp.	ヒ	ユ	俱 羅 婆 迦, 句 欄 茶 迦	17, 26
<i>Andropogon Muricatum</i> Retz.	イ	ネ	アンドロポゴン (烏 戸 羅 香)	17, 22
<i>Anthocephalus cadamba</i> Miq.	ア	カ ネ	キ ャ ダ シ バ 迦 曇 婆 樹, 尼 婆 樹	17
<i>Aquilaria Agallocha</i> Roxb.	ジンチョウゲ	ジ シ コ ウ	ジ シ コ ウ 沈 水, 沈 香	17, 18
<i>Areca Catechu</i> L.	ヤ	シ	ビ シ ロ ー ジ ユ 迦 羅 末 多 樹	17, 27
<i>Aristolochia debilis</i> Sieb.	ウマノスズクサ	ウマノスズクサ	ウ マ ノ ス ズ ク サ (青 木 香)	17, 22
<i>Artocarpus Lakoocha</i> Roxb.	ク	ワ	ラ ク ー チ ャ パン 羅 句 者 樹	17, 27
" spp.	"	"	波 那 婆 樹	17
<i>Asparagus lucidus</i> Lindle.	ユ	リ	ク サ ス ギ カ ズ ラ 天 門 冬	17, 30
<i>Barleria</i> sp.	キツネノマゴ	バーレリア	俱 羅 婆 迦, 句 欄 茶 迦	17, 25
<i>Bauhinia variegata</i> L.	マ	メ	フ イ リ ソ シ ン カ 拘 鞞 陀 羅 樹, 仇 毘 多 羅 樹	17
<i>Bombax malabaricum</i> DC.	パ	ン ヤ	キ ヲ ワ タ 戸 多 乾 他 樹	17, 25
<i>Boswellia serrata</i> Roxb.	カ	ン ラ	イ ン ド ニ ユ ー コ ヲ ノ キ 薫 陸 香 樹 (乳 香)	17, 18
<i>Butea frondosa</i> Roxb.	マ	メ	ハ ナ モ ツ ヤ ク ノ キ 堅 叔 迦 樹, 波 羅 沙 樹	17
<i>Calophyllum inophyllum</i> L.	オトギリソウ	テリハボク	テ リ ハ ボ ク 奔 那 迦 樹, 波 羅 々 樹, 波 吒 利 樹	17, 23, 28
<i>Calotropis gigantea</i> Br.	ガ	ガ イ モ	ア コ シ ン 阿 里 加 樹, 遏 迦 木	17, 18, 28
<i>Cedrus Deodara</i> Loud.	マ	ツ	ヒ マ ラ ヤ ス ギ (木 櫛, 天 木 香 樹)	17, 20, 32
<i>Chamaecyparis obtusa</i> S. et. Z.	ヒ	ノ キ	ヒ ノ キ	21
<i>Cinnamomum camphora</i> Sieb.	ク	ス ノ キ	ク ス ノ キ 樟	20, 21
" <i>cassia</i> Bl.	"	"	ト シ ン キ ン ニ ッ ケ イ 桂 心 香 樹	17, 19

満久：仏典の中の樹木

樹 木 学 名	科	属	和 名 漢 訳 名	頁
<i>Citrus aurantium</i> L.	ミ カ ン	カ ン キ ツ	ダ イ ダ イ	27
" <i>leiocarpa</i> hort ex. Tanaka.	〃	〃	コ ウ ジ	27
" <i>medica</i> L.	〃	〃	シ ト ロ ン 毘闍補羅迦樹, 俱縁樹	17, 27
"    "    var. <i>sarcodactylis</i>	〃	〃	ブ ッ シ ユ カ ン	27
<i>Clerodendron phlomoides</i> L.	ク マ ツ ズ ラ	ク サ ギ	底 羅 迦, 提 勒 迦	17, 24
<i>Crocus sativus</i> L.	ア ヤ メ	ク ロ ッ カ ス	サ フ ラ ン (鬱 金)	17, 22
<i>Curcuma longa</i> L.	シ ョ ウ ガ	ウ コ ン	ウ 鬱 金, 摩 勒 迦 香	17, 22
<i>Cyperus rotundus</i> L.	カヤツリグサ	カヤツリグサ	カ ヤ ツ リ グ サ (香 附 子 香)	17, 22
<i>Datura stramonium</i> L.	ナ ス	チョウセンアサ ガオ	シ ロ バ ナ ヨ ュ シ ユ チョウセンアサガオ 摩 陀 那, 末 陀 那	18
<i>Diospyros Embryopteris</i> Pers.	カ キ ノ キ	カ キ ノ キ	イ ン ド ガ キ 鎮 頭 迦 樹 (柿子)	17
<i>Dryobalanops aromatica</i> Gaertn.	フ タ バ ガ キ	リュウノウコウ ジュ	リ ュ ウ ノ ウ コ ウ ノ キ 龍 腦 香 樹	17, 20
<i>Erythrina indica</i> L.	マ メ	デ イ コ	デ 曼 陀 羅 樹, 波 利 質 多 羅 樹	17
<i>Eugenia carryophyllata</i> Willd.	フ ト モ モ	フ ト モ モ	チ ョ 子, ウ ジ 丁 香	17
<i>Feronia elephantum</i> Correa.	ミ カ ン	フェロニア	ナ ガ エ ミ カ ン 迦 必 多 樹	17
<i>Ficus glomerata</i> Roxb.	ク ワ	イ チ ギ ク	ウ ド ン ゲ ノ キ 優 曇 鉢 羅 樹	16, 17
" <i>religiosa</i> L.	〃	〃	イ ン ド ボ ダ イ ジ ユ 阿説他, 阿輪他, 吉祥樹	16, 17, 18
<i>Flacourtia sapida</i> .	イ イ ギ リ	一	戸 多 乾 他	17, 25
<i>Fraxinus japonica</i> Blume.	モ ク セ イ	ト ネ リ ユ	ト ネ リ コ	18
<i>Gaertnera racemosa</i> Roxb.	キントラノオ	ホザキサルノオ	ホ ザ キ サ ル ノ オ 阿 底 目 他 迦	17, 28
<i>Glycyrrhiza echinata</i> L.	マ メ	カ ン ゾ ウ	ウ ラ ル カ ン ゾ ウ	31
"    spp.	〃	〃	甘 草	31
<i>Holarrhena antidysenterica</i> Wall.	キョウチクトウ	サカキカズラ	コ ネ 吒 ッ シ 句 吒 沙	17
<i>Ichnocarpus frutescens</i> Br.	〃	一	払 利 曳 応 旧 茅 ガ ヤ 草	17, 24
<i>Imperata cylindrica</i> Bea.	イ ネ 科	インペラータ	チ 茅	16, 19
<i>Jasminum grandiflorum</i> L.	モ ク セ イ	ジャスミン	タ イ ワ ン ソ ケ イ 闍 提, 摩 羅 底	17, 18, 22
" <i>officinale</i> L.	〃	〃	ソ ケ 末 イ 素 馨, 須 那	18, 28

木材研究資料 第8号 (1974)

樹 木 学 名	科	属	和 典 漢 訳 名	頁
<i>Jasminum Sambac</i> Ait.	モ ク セ イ	ジャ ス ミ ン	マ 末 利 迦, 婆 利 師 利 迦, カ 迦	17, 28
" sp.	"	"	群 多, 軍 図	17, 23
<i>Juniperus rigida</i> S. et. Z.	ヒ ノ キ	ビ ャ ク シ ン	ネ ズ ミ サ シ 天 木 香 樹	17, 19
<i>Madhuca latifolia</i> M.	ア カ テ ツ	マ ド ッ カ	イ リ ッ 末 度 迦 ペ 樹	18, 31
<i>Mallotus japonicus</i> Muell Arg.	トウダイグサ	アカメガシワ	ア カ メ ガ シ ワ	23
" <i>philippinensis</i> Muell Arg. ( <i>Rottleria Tinctoria</i> L.)	"	"	ク ス ノ ハ カ シ ワ 奔 那 迦 樹, 阿 盧 那 樹, 龍 華 樹, 計 沙 羅 樹	17, 23, 24, 29
<i>Mangifera indica</i> L.	ウ ル シ	マ ン ゴ ー	マ ン ゴ ー 菴 羅 樹, 阿 沒 羅 樹, 注 多 樹	17, 18, 27
<i>Mesua ferrea</i> L.	オトギリソウ	テツザイノキ	セ イ ロ ン テ ツ ボ ク 計 沙 羅, 龍 華 樹	17, 24, 29
<i>Michelia champaka</i> L.	モ ク レ ン	オ ガ タ マ	キ ン コ ウ ボ ク 瞻 蔔, 龍 華 樹	17, 28, 29
<i>Mimusops elengi</i> L.	ア カ テ ツ	ミ ム ソ ー プ	ミ サ キ ノ ハ ナ 計 沙 羅 樹, 蒲 拘 羅 樹	17, 24
<i>Moringa pterygosperma</i> Gaertn.	モ リ ン ガ	モ リ ン ガ	ワ サ ビ ノ キ 戸 俱 魯	17, 28
<i>Morus alba</i> L.	ク	ワ	マ グ	30
" <i>bombycis</i> Koidz.	"	"	ヤ マ グ	30
" spp.	"	"	末 羅 一 摩 樹 芭 蕉, ナ 佉 如 ナ 利	18, 30
<i>Musa sapientum</i> L.	バ シ ヨ ウ	バ シ ヨ ウ	芭 蕉, ナ 佉 如 ナ 利	17
<i>Nerium odorum</i> S.	キョウチクトウ	キョウチクトウ	キ ヨ ウ チ ク ト ウ 迦 羅 毘 羅 樹	17, 18, 30
<i>Nelumbo</i> spp.	ス イ レ ン	ハ ス	蓮 一 華	17
<i>Nymphaea</i> spp.	"	ヒ ツ ズ グ サ	蓮 一 華	17
<i>Opuntia</i> spp.	サ ボ テ ン	オ ブ ン チ ア	建 一 吒 迦 ア 多 ン	17, 29
<i>Pandanus tectorius</i> Sol.	タ コ ノ キ	タ コ ノ キ	ア 鶏 多 ン	17, 29
" <i>utilis</i> Bory.	"	"	ビ ヨ ウ タ コ ノ キ	29
<i>Panicum italicum</i> L.	イ	ネ キ	払 利 一 曳 応 旧 ア ン マ ロ ク	17, 24
<i>Phyllanthus Emblica</i> L.	トウダイグサ	コミカンソウ	ア ン マ ロ ク 阿 摩 勒 樹	17
<i>Picrasma quassioides</i> Benn.	ニ ガ キ	ニ ガ キ	ニ ガ キ 苦 練 木	16, 17, 18
<i>Piper Betle</i> L.	コ シ ヨ ウ	コ シ ヨ ウ	キ ン マ	28
<i>Pinus longifolia</i> Roxb.	マ	マ	ヒ マ ラ ヤ マ ツ 沙 羅 羅 (戸 利 縛 色 得 伽 藥)	18, 32

個人 國 人 事 業 事 業 事 業

— 37 —